変身母娘ビューティクラフト

堕としあう母娘は悪に染まる

立ち読み版

小説　木森山水道
挿絵　大林森

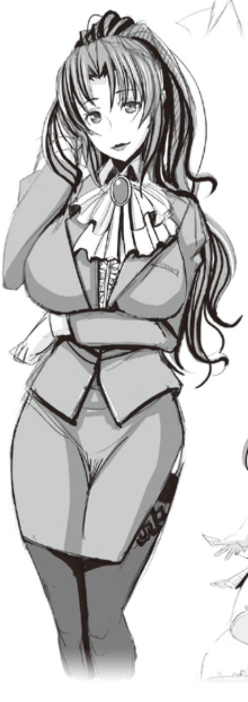
プロローグ 006
第一話 誕生！　母娘はビューティクラフト！ 007
第二話 瀬戸際！　処女の肉体に刻まれる牝の悦び。 032
第三話 悪堕ち！　追い込まれる未亡人。響く恥声。 068
第四話 母娘姦！　実の母が奪う愛娘のヴァージン。 110
第五話 堕深化！　女子学園生は学園内で春を販ぐ。 144
第六話 救出劇！　円熟女体は浄化性交の為にあり。 182
最終話 終焉！　母娘はラブネスクラフト！ 218
エピローグ 255

登場人物紹介

Characters

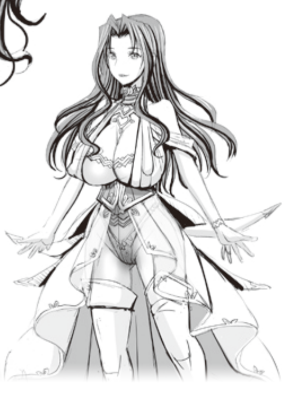
うなばらなぎさ
海原 渚

エネルギー生命体「アタラクシア」に与えられた力によってビューティサニーに変身して戦う女子校生。正義感が強い性格で、困った人を見逃せない。運動も勉強もできる文武両道な女の子。



うなばらみなと
海原 湊

学園で教師を務めている渚の母親。娘同様、アタラクシアの力でビューティカームに変身する。夫とは十年前に死別しており、熟れた身体を持て余している。



自分の独白に、胸がトクンと高鳴った。
萎えることのない怪人ペニスが、妙に愛しく見えてくる。
「のどの奥まで呑み込んで、頬を締めて、口の中全体でチ▒ポの隅々に吸い付くんだ。パイズリでチ▒ポをすっかり包んだのを思い出しながらご奉仕するんだよ」
「う、うん……あ〜〜〜むっ、ジュブブブブ」
サニーはしおらしく返事をすると、瑞々しい唇を大きく開け、肉棒を咥え込む。
(射精したら萎えるって聞いていたのに)
友人の猥談で得た知識など役に立たなかった。怪人の勃起はますます熱く硬くなり、逞しい脈打ちようは口内どころか頭の芯まで揺すぶってくる。
(すごい……まだこんなに男らしい)
「んむっ、ジュブブブ、ンフーッ、ジュボッ、ジュボッ」
ふしだらに小鼻を膨らませ、鼻息を荒らげるサニーは、長い髪を揺らして頭を振る。
誰にも見せたことのないほど頬を凹ませ、口内粘膜で勃起の根本まで吸い付いていると、肉棒は嬉しそうにビクついて、射精の残滓と新しい先走り汁の混ざり汁を吐いてくる。
(この匂い……この味……頭がくらくらする)
不快なはずの生臭さも、舌を鋭く痺れさせる苦みも、今では魔性の恍惚汁だった。
触手に撫でられ、揉まれ、擦られている下半身もますます気持ちよくなっていく。
「アハハ、いいぞサニー。スカートをめくってあげるからお尻を振るんだ。フェラだけじ

ゃなく、目でも僕をもっと楽しませるんだ」
(そんな恥ずかしいこと……でも、その方が射精させやすいのなら)
サニーは羞恥と興奮で頬を真っ赤にしながら、触手体液で濡れきったスパッツのお尻を左右に振る。正義のヒロインにあるまじき、敵を興奮させるだけの尻振りだ。
「いい光景だ。震えがくるよ。そうだ、尻尾を生やしたらどうかな」
怪人は身体から伸ばしていた触手の一匹を切り離す。蛇のような肉紐は、サニーの肛門へ這っていくと、スパッツを破き、奥へと進入していった。
「んんああっ……んひぅぅぅううう、ンひぃぃぃ〜〜〜〜!!!」
(あんなに丈夫なコスチュームがあっさり破られて……あああ、触手がお尻の穴に)
ローションじみた体液でたっぷり濡れた触手は、自分の形に肛門を押し広げるだけにとどまらず、直腸も拡張して進んでいく。
「いいぞ、正義のヒロインが触手の尻尾を生やしてるなんて、すごく刺激的だ。力のほとんどを集中させてスパッツを破った甲斐があったよ」
(やだ……ゾクゾクする)
体温や硬さは、今しゃぶっているペニスと同じだった。発情した女体は、お尻の穴を征服される嫌悪よりも被虐快感を覚える。サニーの背中が粘っこく震え、スパッツの下半身も鋭く引きつった。
「そら、お尻を振れ、尻尾を揺らせ、尻振りダンスしながらしゃぶって射精させろ！」

尻タブを揉んでいた手のひら触手が、スパンキングをしてきた。
パァンッと小気味よい打擲(ちょうちゃく)音が響き渡り、被虐の官能がサニーの下半身で渦巻く。
(こんなの……カームも見てるのに)
サニーは飼い主の調教に従順な牝犬のように、肛門から触手を生やしたお尻を大きく振る。大切な女性が見ている、敵のいいなりとは言え進んで恥知らずな行為をしている。そう思うと心臓が妖しく痺れ、身体がふわりと軽くなり、女壺も淫熱で煮え滾る。
(あぁ、口の中のおチ[illegible]チン、すごくビクビクして……あたしも、もうすぐイキそう)
サニーは、奉仕する牡と共に絶頂したいと思いながら、口で扱く肉棒の先に舌を這わせる。パイズリの時に覚えた通り、亀頭の隅々を媚たっぷりに舐め回す。
(ちょっとだけ……ちょっとだけあたしも絶頂を知りたい)
一度射精したくらいで怪人が元に戻らないのなら、自分だって一度位は構わないだろう。
(あたしも、イキたい……ああ、オーガズムを知りたい)
サニーは白む頭の中で、絶頂することだけを考えていた。
怪人は射精したとき、本当に気持ちよさそうに顔を弛ませている。
羨ましい。女の悦びを教えられ、味を占めた身体が嫉妬で疼いた。
(『サニー！　気を確かに。味を占めたら戻れなくなりますよ！』)
(大丈夫っ……一回だけ、一回だけであとは我慢するから……もう、身体が限界なの)
全身の細胞が淫らに煮立ち、女のエクスタシーが欲しいと叫んでいる。

味方のアタラクシアの警告を無視し、サニーは敵に奉仕し続けた。

「イクぞサニー、チ[redacted]ポ全体を吸え！　奥まで咥え込んだまま射精を受け止めるんだ‼　こっちを見て正義のヒロインの精飲顔を敵に見せながら怪人ザーメンを全部飲め!!!」

敵の命令に従って、媚びた目線を捧げるサニー。

頬を凹ませ、ビクつく勃起のすべてを吸い上げる。

怪人はサニーと視線を絡ませつつ、正義のヒロインの口中に汚い精液をぶちまけた。

ドグッ！　ドグドグドグ！　ドグゥゥウウウウウウ〜〜〜〜〜！

「んむぅぅぅぅ！　んぐぅっ！」

（ああ、出てる……熱い精液、あたしの口の中にたくさん出てる）

口一杯に広がる怪人精液の味と匂い。頭を蕩けさせるような雄々しい射精律動。

サニーの顔から一気に力が抜け落ちて、眉目がこぼれんばかりに垂れ下がった。

怪人を圧倒した凛々しい顔つきは影もない、だらしのない牝顔になった正義のヒロインは命令通りに敵を見詰めながら、射精を受け止め続ける。

股間を擦っていた触手亀頭が、ビンビンに勃起したクリトリスに当たった瞬間、サニーは背筋を仰け反らせる。絶頂するのだと本能的に悟っても、一切逆らわず身を委ねた。

ビクビクビク！　ビクククク！

（あ、ああああ！　す、すごいっ！　こ、これが絶頂……あたし、イってる！）

口中に吐き出される粘い汚汁をゴクゴク飲み下しながら、ヒップを掲げて這い蹲る正義

のヒロインは、禁断の悦びで全身を満たし、ふしだらに痙攣した。
自分も達しながら飲む精液は、絶頂の多幸感を濃厚にしてくれる。もっと飲みたいという発情した牝らしい衝動に従い、浄化に不必要な精飲を積極的に行う。
（カームに……ママに見られているのに、んああ、気持ちいいの、止まらないっ）
初めて体験する絶頂快美に打ち震える正義のヒロインは、実の母親のことを意識するだけでも背筋を栗立たせ、再びふしだらな高みに上り詰める。
（またイっちゃった……で、でもあたしはまだあたしだから……もうすこし、いいよね）
サニーは新しいプレイをおねだりする心地で、怪人をじっと見詰める。
肛門の触手を抜くこともせず、尾を振る犬のようにお尻を振りたくる。
口中では、根本まで咥え込んだ肉棒の先を、媚たっぷりに舐めていた。
「ククク、可愛いよサニー。そんな風に求められたら断れないね」
二度放っても肉棒を萎えさせない怪人は嗜虐的に口角を吊り上げた。敵の邪悪な笑みを見たサニーは嬉しそうにスパッツのお尻を振り、肉唇をヒクつかせるのであった。

　ベッドを軋ませ、足下に上がってきた怪人に、脂の乗った太股を掴まれた。

「慌ててどこに行くつもりだ？　ククク、趣向は気に入ってくれたようだな。エピクロス様は、何も学園だけに張り付いていたわけではない。ビューティクラフトを眷属に仕立て上げる作戦を練るため、サニーとカームの私生活も観察しておられたのだ」

　はしたなく開く太股を、怪人は力ずくで引き寄せる。

　いつの間にか怪人は裸になり、筋骨隆々で逞しすぎる牡肉体を晒していた。

「やめてくださいっ……はあはあ、わたしは今もあの人の妻です……あなたのセフレ妻には絶対になりません……それに、いくら辱められようとも、必ずあなたを元に戻してみせます。ビューティカームの名にかけて、アタラクシアさんの善意を無駄にはしません」

「グヒヒヒ、言うじゃないか。だがな、お前はもう俺に堕ちるしかないんだぞ？」

（ああ……わたしのアソコが、ストロングさんのペニスに近づいていく）

　カームと怪人の股間同士が、性器の熱気を伝えあう至近で対面する。

　黒ずんだ赤銅色の勃起巨根の先からは、先走り汁が糸を引いて垂れていた。

　三十七歳の秘唇は細く絞られた蜜濡れレオタードの股布を咥え込んでいる。そのたっぷりした肉をはみ出させながら、淫靡にヌラヌラ光っていた。

「入れるぞカーム。俺のチ▒ポをとくと味わえ」

　片手でカームのニーハイブーツの太股を抱えたまま、もう片方の手でレオタードの股間に触れる怪人。

　すると、臍から下をカバーするレオタードの布地が収縮した。ほどよく脂の乗った下腹部がみるみる露出していく。股間にかかる布地は紐の細さまで痩せてしまい、蜜濡れして腫れぼった正義のヒロインの淫唇の谷間に食い込んだ。
「ドレスの胸元を谷間に押し込んだ時と同じで、アタラクシアの力に干渉して縮めたんだよ。いやらしい眺めだ。オマ□コ丸出しにするよりも、ずっとチ□ポにクルぞ」
　ネットリ見詰める怪人のペニスが、根本から暴れるように前後に震えた。
「このよく手入れをされたツルツルオマ□コのお味はどうかな？　指で掻き回した時も勃起するくらいよかったが、チ□ポで感じた方がもっといいはずだからな。楽しみだぜ」
　怪人はレオタードに触れた手の指で、秘裂に落ち込んだ布地を引き上げ、ずらす。
「いやっ……それだけは許してください！　ここは夫との思い出のベッドなんです！」
　カームは脱力する上半身を叱咤し、一生懸命ベッドの上へ這っていこうとする。
　グチュリ……。
　卑猥な泥濘の音が、必死のカームを嘲笑する風に、夫婦の寝室に響きわたった。
　勃起の根本を掴む怪人は、先走り汁を漏らす先端を、浅く秘裂に挿入している。
「ここでするからいいんだろうが。ほら、観念して俺を受け入れろ」
　グヂュリッッッ……。
（あ、ああ。入ってくる……あの人と愛しあったベッドで、他の男性のペニスが）
　怪人は、色っぽく肉のついた細腰をガッシリ掴み、カームの身体を引き寄せる。

（この感じ……やっぱり、あの人よりもずっと大きい）
女の快感を忘れていた淫唇が、怪人の亀頭に沿って、大きく大きく広がった。
（わたしのアソコ……ストロングさんの亀頭の先に吸い付いている）
「もっと深く繋がるぞカーム。お前のオマ[redacted]コを完全に俺のチ[redacted]ポの形に変えてやる」
「だ、だめぇ……こんな、あの人より大きいペニスを、このベッドで入れないで……」
ジュッブゥゥゥゥゥゥ!!!
「ああ、はあ、はあ、ひぅぅっ、んんっ……あっ、ああッ、ンぁあぁンンン！」
カームの股間がゆっくり、だが止まることなく怪人の下腹に引っ張られていく。
（わたしの中、こじ開けられている……ペニスの先っぽに貫かれている）
十年間、男性器の進入など許していなかった膣孔が、掘削されていく。
カリ高な肉の尖りにこじ開けられる媚肉の筒は、後続の太い肉幹に固定され、元の形に戻るのを許されない。
（膣が……このペニスの形に変わっていく……型どりされていくわ）
夫の分身を包み込む時を遥かに凌駕する拡張感に、カームは艶やかに息を乱す。
「想像以上の名器だぜ、カームのオマ[redacted]コはよ。たっぷり出てる蜜と柔肉のお陰で吸い付きは抜群だ。中にびっしり並んだヒダも、ブラシみたいに高い。皮の剥けたチ[redacted]ポの先も、カリの表も裏も、皮の繋ぎ目も、裏筋も、どこもかしこも擦れ心地は最高だぜ」
ズンッ！

怪人の逞しい亀頭が、長年誰も触れたことのなかった子宮口に突き刺さった。
一気に溢れかえった女の蜜が、密着したふたりの股間を等しくびしょびしょにする。
「はあ、はあ……ンン、あ、んんン、ああぅンンンン〜〜〜！」
（一番奥まで……サニーが、娘が通ってきた場所まで征服されてしまった）
駆け抜けた快感電気の甘すぎる衝撃に、カームは眉目と口をハの字にし、長く尾を引く嬌声を張り上げた。普段は低く穏やかな美声は、夫以外には聞かせてはならない淫猥なソプラノとなって夫婦の寝室に木霊する。
「へへへ、とうとうビューティカームと一つになったぜ。亀頭の先を子宮口に押し返される気持ちよさはどうだ。チ■ポの隅々まで正義のヒロインの名器オマ■コに包まれるこの快感は、本当に堪らねぇな」
（あぅンン……はああっ、んふぅぅ、ああっ、中でおチ■チンが反り返ってる）
根本まで収まったペニスは、断続的に突っ張りながら、カームの膣側をグイグイ圧迫してくる。熱さも硬さも重さも増していて、牡に征服されたのを思い知らせてくる。
「ぬ、抜いてください、あの人との思い出のベッドで、わたしをこれ以上穢さないで……んっ、わたしはまだあの人のことを愛しているのです。あなただって奥さんとお子さんがいるではないですか……うまくいかなくとも、悲しませることは、あふぅっ」
「他の男のチ■ポを奥の奥まで咥え込んで、色っぽい声で鳴いた女がよく言うぜ」
怪人はカームの背中に手を回し、軽々と上体を起こした。

自分はあぐらをかく対面座位になり、肉壺を征服された正義のヒロインと向き合う。
「ウヒヒ、近くから見ると一段と美人だなカームは」
背中に両腕を巻き付けたまま、怪人はカームをきつく抱きしめた。
ムニュゥゥゥゥゥ！
三十七歳の正義のヒロインの肉釣り鐘が、怪人の厚い胸板と潰れあう。
（あぁっ……逞しい男の人の胸板が……わたし、年下の男性にいいようにされてる）
鍛え上げられた胸筋と隙間なく触れあうカームは、胸をドキドキさせた。
牡に抱きすくめられる実感は、肉棒を包み込む膣肉もキュンと疼かせる。
「憧れのオナペットの爆乳が俺の胸元一杯に広がっていい気持ちだぜ。しっとり乳肌が吸い付いてくるこの感じ……重いオッパイ肉の圧迫感もどうだ……おらっ、オッパイだけでなくお前の身体をもっと感じさせろ！　お前は俺の身体を感じてもっと発情しやがれ！」
怪人はベッドのスプリングを利用しながら、尻を上下に弾ませる。
ゆったりした突き上げだが、高いカリ首は蜜ヒダと存分に擦れ、快感電気が起こる。
ズン、ズンと子宮口を上に押されると、意識が途切れ途切れになってしまう。
「浄化したいビューティカームとしては、何度も俺に射精させたいよな。だったら、学園の学生も教師も大好きなそのお綺麗な声で、卑猥な台詞を言えよ」
耳元に口を寄せた怪人が、卑語のお手本を言ってきた。
（また、こんないやらしい台詞を言わせようとするなんて）

聞くだけで耳まで熱くなる猥雑な台詞など口にしたくはないのだが、このまま緩慢にピストンされていても、自分は果ててしまうだろう。そうなれば恥をかくだけでなく、悪に堕ちてしまうかも知れない。愛するサニーの敵になってしまう可能性があるのだ。

「まだ抵抗するなら、もっと恥をかかせてやるだけだ……ほぅれ、尻が丸出しだぜ？」

背中を抱いていた怪人の手が滑り降り、レオタードの後ろ布に触れた。すると、胸元のドレスを引き絞られた時と同じく、バックが紐並に細くなる。

「爆乳に劣らず、たっぷり肉の詰まったケツだぜ。ムチムチプリプリしてよ。こうしてTバックを穿いてるみたいだといっそうそそるな」

（なんてはしたないの？　こんないやらしいお尻、あの人にも見せたことはないのに）

首を巡らせ、背後の姿見を見るカーム。怪人がTバックの尻を撫でる様子は、妻や恋人にする風に馴れ馴れしい。

屈辱を感じたカームは、逃れようともがく。紐同然のレオタードの後ろ布からはみ出す巨尻をタプンタプンと波立たせながら、精一杯お尻を振る。

「グヘヘ、お前の可愛い肛門を弄って欲しいようだな。ほれ、指でクポクポしてやる。どうせ初めてだろうが、俺は指からも触手汁を出せるから安心しな。気持ちいいぜ？」

じわっと粘液を出した太い指先が、物欲しそうに開閉する肛門を塞ぐ。

（あ……ああ、入ってくる……お尻の穴にまで指が）

「どうだ、前にチ[redacted]ポを入れながら、ケツ穴にも太いのが入ると思い切りクルだろ？」

浅く指を抜き差しする怪人。カームは彼に抱きしめられながら全身をわななかせた。
(だめっ！　お尻が痺れて、アソコまで疼いて……こんなの耐えられない)
肛門を責められるなど、夫にもされたことはない。
アブノーマルなおぞましい性行為だと思うのだが、肛門は歓喜している。
怪人が射精するより先に自分がオーガズムを迎えるのは確実に違いない。
快感で意識が朦朧とする中、危機感に駆られていると棚の上の写真立てが瞳に映る。
まだ夫が健在の頃にした家族旅行の大事な写真だ。若い自分も今は亡き愛する男性も幸せな微笑を浮かべ、小学生の渚は元気一杯にピースサインを作っている。
(そうよ、写真の中のあの人が見ているのに、これ以上、あの人と愛しあったこのベッドで辱められるわけにはいかない……こんな不倫セックスは早く終わらせなければ)
「ああ、い、言います、言いますから……これ以上、いやらしいことをしないで……」
「フヘヘヘ、ようやく観念したか。さぁ言え、その綺麗な声で下品に言うんだ」
カームよりも二回りは大きい筋骨隆々の牡怪人は、尻を激しく弾ませだす。
尻穴を弄んでいた指を根本まで入れ、ケータイのバイブよろしく震わせる。
「ストロングさん、ビューティカームのお、お……お、オマ■コで、射精してください。お好きなだけ掻き回して、あン、高くて硬いカリで引っ掻いて、オチ■ポで気持ちよくなって、あふぅぁ、ドビュドビュ濃い怪人精液を吐き出してくださいっンン」
「グヘ、正義のビューティカームとは思えない台詞だな。おら、もっと言えよッ」

怪人は身体ごと尻を弾ませ、ベッドのスプリングを軋ませる。
夫と情熱的に交わった時にも聞かなかった軋み音が木霊した。
「夫とサニーを、娘を作ったこの子作りベッドで、はあ、はあ、夫以上のあなたのオチ○ポで、わたしを牝に戻して欲しいんですっ」
「グヒヒヒ、マ○コがグイグイ締まってきたぜ、ヒダもむしゃぶりついてくる……このスケベカームめ。自分たちは教師だ、妻帯者だ、不倫は許されないとか言いながら、ノリノリじゃねぇか、旦那のことは今も愛してるんだろ？」
「あン、あぁン、愛してます、今も一番あの人を愛してます、んあぁぁ」
他の男の肉棒に貫かれる三十七歳の未亡人は、蕩けさせられた声音で言い放つ。
（どうしてこんなに興奮するの……いけないことをしているのに、わたしの身体のすべてが、あの人に抱かれていた時以上に女に目覚めている）
降りてきた子宮口が牡の尖りにしたたかに打擲される度に。
入り口から最奥までの粘膜を高いカリ首で擦られるほどに。
太い肉幹の盛り上がった血管の脈動を膣ヒダで感じる毎に。
先端からビュルリビュルリと出始めた先走り汁が、蜜膣に染みていくにつれ。
怪人の股間と自分の淫唇が、糸を引きながら離れ、再びぶつかり飛沫をあげる瞬間。
十年間、女の悦びを忘れていた女体は華やぎ、未知の悦びに迎合していく。
（ムラムラして堪らないわ……あぁ、わたしもイキたい、快楽をたっぷり味わいたい）

悦楽で意識がぼやける中、ずっと快感責めされてきた正義のヒロインは、浅ましい牝本能に浸食され始めていた。
心に湧いてくる淫欲衝動のままに、ビューティカームのシンボルでもあるニーハイブーツの足を怪人の腰に絡ませ、広い背中に回した細い両手で力一杯抱き寄せる。
(素敵……なんて広い背中……ガッシリした腰回りなの)
相手は七つ年下の既婚者であり、同僚の教師であり、浄化するべき敵なのに。
カームは全身の膂力を総動員して、Tバックにされたお尻をたゆんたゆん弾ませる。正義のヒロインは、敵と息を合わせて性器同士を擦りあわせるのに没頭していた。
「オラ出すぞビューティカーム！　おねだりしろ！」
「ストロングさん一杯出して、ビューティカームのいやらしいオマ■コを、敵のあなたの精液で一杯にして欲しいの！　夫と愛しあって、サニーを作ったこのベッドで、あの子が出てきた大事な部分を特濃怪人精液で染め尽くしてください！」
耳元で教えられた言葉を、ためらうどころか、情感たっぷりに叫ぶカーム。
先走りを漏らす怪人のペニスが、ピーンピーンと何度も硬く突っ張り、反り返る。
(あの精液が出るのね……わたしの胸を隅々まで生臭く染め上げたあの濃い精液が)
頭の中に、胸に射精された時のことが思い浮かぶ。
すると、女壺がキュゥッと強く収縮し、これから汚液を吐き出すペニスを刺激した。
「いいぞ、もっとマ■コを締めろ、犯す俺にエロい鳴き声を聞かせろ！　オオオッ、イク

ぞカーム！　お前の飢えた未亡人マ▒コに、俺の怪人エキスをたっぷり注入してやる！」
カームと怪人の股間がグイグイ張り付き、子宮口と亀頭の先がべったり密着した。
ふたりがこれ以上ないくらいに抱きしめあう中、怪人の精液が炸裂する。
ビュルルルルッッッッ！　ビュグ、ビュググググ！　ビュルンンン！
「はあ、はあっ、ああ、あっ、アッ、アッ……ンン、あぁぁアアアア～～～～！」
怪人の顔の横で頤を跳ね上げ、天井を見ながら恥声を張り上げるカーム。
極彩色の光で脳裏を満たしながら敵とぴったり抱き合いつつ、全身を痙攣させる。
（出てる……わたしのオマ▒コに、ストロングさんの精液が出てる）
胸に浴びた時以上に熱く粘い怪人精液は、まるでマグマだった。
女の悦びを忘れていた熟女壺の隅々を灼き、匂いをつけていく。
（ビクビク震えながら射精されるの、気持ちいい……）
巨根の射精痙攣が媚肉の一片一片に染み込んでくると、膣全体が淫らに熱くなる。
牝として目覚めた蜜ヒダは、さらなる射精をねだる風に吐精肉棒をしゃぶりだす。
「エロく鳴け！　俺のエキスを正義のヒロインマ▒コで呑め！　イキ顔を見せろ！」
怪人は射精を続けながら、力ずくでカームを少し引きはがす。
普段の凛とした顔つきではなく、膣内射精される快感に酔うトロンとした牝顔カームを
じっくり見ながら肉棒をさらに硬くして、新しい精液を子宮口に放つ。
ふたりの結合部からは、黄色みがかった濃厚精液と、白みの強いカームの本気汁が流れ、

海原湊とその夫の思い出のベッドを汚していた。
(はあああ、もう本当にだめ…………わたしもっとイキたい。思い切りイってみたい)
怪人と共に達したものの、まだまだ牝欲のムラムラは収まらない。
愛する夫と交わった時にも覚えなかった、悦楽への飢餓感で女壺が狂おしく疼く。
これほど欲望を覚えるのは、怪人の汚れたエネルギーが流入しているせいではないかとふと思いつくものの、肉壺をミッチリ埋める怪人ペニスの牡らしい硬さと熱と律動が正常な思考を蕩けさせ、どうでもよくなってしまう。
「はああンンっ……もっとぉ、んふぅぅぅ……もっとぉン」
魂の底から湧く浅ましい衝動に駆り立てられるままに、腰をゆるゆる動かし始める。
「ヘッへッへ、とうとう俺が何もしなくとも自分から腰を振り出したか」
筋肉の固まりのような腕でカームを抱え上げると、怪人はベッド縁まで歩いた。
ドッカリ腰を下ろし、カームの細い背中に胸板を重ねる背面座位の体勢になる。
カームのニーハイブーツの熟れ足がガニ股になり、紐同然のレオタードの前布を横にどけた陰唇の、怪人の肉棒を頬張る様子が正面から丸見えになる、正義のヒロインも、女教師も決して晒してはならない破廉恥な格好だった。
「こ、ここは……」
「言っただろう、俺の中のエピクロス様はカームとサニーを張ってたって。この部屋の棚の上に家族写真が飾ってるなんてお見通しだったんだよ」

せせら笑う怪人は、淫猥ポーズで写真立てと対面したカームの胸を揉む。
「サニーを作ったり、旦那と愛しあったベッドで不倫セックス……いや、命令してないのに自分から腰を振ってきたから完璧に浮気セックスか。とにかく、間男の俺とラブラブ交尾してたのを、この写真の中の旦那もサニーも見てたってことだ」
「あぁ……はぁ、はぁあ……いやぁ、向き合わせないでぇ、あんンっ……はぁ、はぁ」
「俺とお前は聖職者だから、俺が妻子持ちだから許されない。そんなことを言ってた癖に、スケベに腰を振って、ナマ中出しされていたのをよぉ」
亡夫の在りし日の姿に見詰められているというのに、カームの双乳は甘く痺れる。
「俺は浄化しなくちゃいけない敵だろ？　今ここにサニーがいたらどう思うだろうな」
ベッドのスプリングを味方にしながら、怪人は腰を突き上げてくる。
「あいつがアプラバルの手にかかったのはカーム、お前を助けるためだ。お前が足手まといにならなきゃ、あんな目にはあわなかった。なのに、お前ときたら俺とのセックスにメロメロになってよ。そんな淫乱が、ビューティクラフトを名乗れるのか？」
（その通りだわ……わたしは最低の女よ…………皆を救う資格なんてない）
怪人の言うことはいちいちもっともだった。
浄化のために仕方なく。そう思っていたのに、いつの間にか敵に夢中になっていた。
（教師としても、母としても失格よ……わたしなんかに想われたあの人も迷惑だわ）
自責の念に駆られて俯くカーム。しかし、それも一瞬だった。

「んふ、あふぅ……ああ、ンン」
乳房を揉まれると乳悦が満ち、蜜壷を擦られると甘い快感電気が駆けめぐった。
(こんな時にも身体は悦んでいる。ムラムラが治まらない……本当にわたしは淫乱よ)
正義のビューティカームは、罪悪感よりも牝欲を覚えている。
「自分ってやつがわかったようだな。俺もわかるぜカーム。イキたいんだろ、お前は。俺は淫乱のお前も愛してるぜ。お前さえよければイかせてやる」
「ぬけぬけと……こうしたのはあなたじゃない！　あなたを救いたい気持ちにつけ込んで、いやらしいことをして……わたしを淫らに貶めた挙げ句に戻れなくして！」
カームは涙をこぼして怒鳴った。誰かに敵意をぶつけるなど初めてかも知れない。
「俺が引き受けてやるよ。サニーは潔癖な年頃だ。裏切って浮気交尾したお前なんて絶対許さないだろうが俺は違う。たとえ世界を敵に回しても、誰よりもお前を愛するぜ？」
べったりつけた亀頭の先で、子宮口を捏ね撫でながら優しく囁いてきた。
子宮も膣もじぃんと痺れ、カームは甘く喘いだ。恥蜜がじわっと溢れる。
(そんなことを言われたら、本気にしてしまう……この人を憎めなくなる)
性交中に感じた怪人への頼もしさが蘇り、膣内に収まる肉棒へ愛しさが募っていく。
「本当に……わたしを愛してくれるのですか…………？」
「勿論だ。愛してるぜビューティカーム」
怪人の真摯な声と言葉が、夫に捧げた以上の愛情を心に湧かせる。

（こんなにおチ■チンが逞しくて、絶倫で、わたしをガツガツ求めて、女に産まれた悦びを堪能させてくれる男性が……わたしを何度でもイカせてくれるに違いない男の人が、こんなわたしを愛してるって言ってくれた………）

まるで抱擁する風に、女壺が怪人ペニスを締め付けて、新しい牝蜜を溢れさせた。

「これからたっぷり、愛情を示してやるよ。ほら、お前も俺への愛を見せろ。もう我慢することはないんだ。思うように腰を振っていいんだ」

「は、はい、はいっ、ああ、ストロングさん」

カームはガニ股のまま、熟れ尻を思い切り振り始め、たゆんたゆん波立たせる。

怪人はカームに合わせて力強く迎え腰を打ち、彼女の身体を芯から痺れさせた。

「あン、あン、気持ちいいっ！　あああ、オマ■コ擦れて気持ちいいですっ！」

「ククク……スケベな腰振りだな、本当に淫乱な正義の未亡人ヒロインだぜ」

「だって、ずっとムラムラしていたんですもの、ああ、この巨根オチ■ポで責められたら、誰だって我慢できなくなります」

まるで想いを捧げる夫と愛の睦言を交わす風に、抑えてきた欲望を吐露する。

「俺のセフレ妻になったからには、ケジメはつけとかないとな。愛するカーム」

怪人はカームに『けじめ』の台詞を囁く。

「んふぅ、そんなことを、ああ、恥ずかしいわ……でも言います」

カームは言葉とは裏腹に淫らな微笑みをこぼした。

結婚指輪をつけた手に怪人が重なり、カームの手を双乳の片方に導いた。

「渋木先生の奥様、先生を寝取ってすみません……あン、あなた、あなたのことは愛しているけど、わたしはこの人のセフレ妻になりますっ、あふンン、サニー、裏切ってごめんなさい、ビューティカームは敵のストロングさんの極太オチ■ポに屈服しちゃったの」

ゾクゾクゾクゾクゾクゾクゾク！

写真立てと真っ正面から向き合って、怪人と仲良く自分の胸を揉み、乳首を転がしながら言い終えると、一気に頭の中が白くなり、背中がビクビク震えた。

（ああっ、わたしは最低だわ……でも、最高に幸せ！）

「この変態め！　言っちゃならない台詞を言いながら感じてたな？　マ■コが思い切り締まって、搾り取られそうになったじゃねぇか」

「あなたがわたしをこうしたんじゃないですか、んふぅ、ねぇ、一緒にイキましょう、今度こそ、ふたりでイキたいです。あの人がサニーを作った精液よりもずっと濃いあなたの牡のエキスを浴びながら、イッてみたい……っ」

「いいぜカーム。そら鳴け！　エロく鳴きながら敵の俺とイケ！」

怪人はモノにしたセフレ妻の腰に太い腕を巻き付け、思い切り下腹を跳ねさせる。

未亡人女教師は、結婚指輪が嵌まった手を、結婚指輪をつけた怪人の手に重ねた。

もう片方のカームの手は、自分の肉釣り鐘を掬い上げ、貪欲に揉みしだいている。

「あの人との夫婦セックスよりも感じてしまう、ああン、浮気交尾なのに、敵と味方の許

されないオマ■コなのに、女の悦びを一番感じて幸せになっちゃう！」
筋肉と牡棒の圧倒的な感触。禁忌を犯す背徳の悦び。
未知だった愉悦の味を占めたビューティカームは、美声を痴声に変えて鳴く。
「グヘヘヘヘ、子宮がグイグイ降りて来やがった！　そら、降りてきた子宮口に射精されてイケ！　敵のチ■ポ汁でマ■コのどこもかしこも満たされてイケ！」
正義のヒロインの女壺の中で、最高潮に勃起した怪人ペニスが何度もビクつく。
ビーン、ビーンと突っ張っては反り返り、牝に目覚めた熟女膣を内側から押す。
一緒になって快楽を貪るカームは、心地いい浮遊感に包まれていた。耳鳴りと共に意識が遠くなり、けれど身体から溢れ出しそうな大きくて濃厚な快楽だけはハッキリ感じる。
（ストロングさんのオチ■ポ、ああ、わたしの中で射精しそう……ンッ、わたしも）
「ああ、はあぁ……はあっ、あっ、あっ、んあああ、オマ■コ、イクッ……！」
ビューティカームの子宮口に、ストロングのいやらしい牡肉槍が突き刺さった。
ズゥゥゥンと、身体の芯から揺さぶられ、ビューティカームは意識を飛ばした。
幸せな家族写真の前で赤い舌を突き出して、悦びの弛み目から涙をだくだく流し、牝の至福を込めて背筋を仰け反らせ、爛れた愛を誓った赤銅色の筋肉怪人に身を委ねる。
「お、オオオオオ！　ヒダ高マ■コがチ■ポ絞る!!!　堪らねぇ、絶対この女は手放さねぇぞ！　オラ呑め！　怪人牡エキスをたっぷり味わう幸せを噛みしめて、俺にもっと溺れろ、敵の穢れたエネルギーを受け入れて堕ちろ、ビューティカーム！」

ドグゥゥッゥゥゥウウウ！　ドグドグゥゥ！　ドビュグググググゥゥゥゥゥウウ！

既に二度放っているにもかかわらず、三度目の放精は最も激しかった。

灼熱の濁液が、敵に屈服した女の体内を染め上げ、敗北陵辱の快楽を刻み込む。

(ビクンビクン暴れている……わたしのオマ[redacted]コを内側から揺すぶりながら自分のエキスを染み込ませて……わたしが負けたことを、自分の女だっていうことを思い知らせてくる)

「ん、ンンン……もっと、もっと出して、わたしの中でドビュドビュ射精して！　ビューティカームのオマ[redacted]コを、わたしの全部をストロングさんのものにして欲しいの」

ブォォォォ……ブォォォオオ……。

完全に従属を認めたビューティカームのコスチュームが、幻影のように揺らめいた。

コウモリめいた羽を生やし、露出度が高くて扇情的な衣装を纏い、見る者の性の欲望をくすぐり、解放へと誘惑する魔性の魅力を醸す美貌がチラチラと浮かび上がった。

清らかな青い瞳も儚げに明滅し、エピクロス側に堕ちた証の真紅の瞳に変わる。

「ククク……アタラクシアが選び力を与えた女が、我の眷属に成り果てていくぞ」

ガニ股で下品に腰を振り、怪人の射精をねだるビューティカームに迎え腰を打ちながら、怪人はエピクロスの口調で歓喜するのであった。

極細の前布を食い込ませるクレヴァスの奥からは、若い牡の生殖液らしい、黄色みがかった濃厚な精液が少し溢れていた。

「どんどん出てくるわ。双子くんたちからこんなに搾り取っていたなんて。あたしの弟か妹を孕んでくれるつもりだったの？　あたしに同級生をパパと呼ばせたかった？」

伸ばした指を実の母の淫唇に当て、左右にくつろげる。

すると、汁がドロリと漏れてきた。むせかえるような生臭さと、熟女の愛液の甘酸っぱい匂いを放ち、か細い布を汚し、粘膜をくすぐり、会陰の肉を伝い、地面に落ちていく。

「やめてサニー……ああ、あの子たちとセックスしたことを思い知らせないで」

真っ赤な顔で、いやいやと髪を振るカーム。

「亡くなったパパを今も愛している貞淑な未亡人だとばかり思っていたけれど、双子くんたちだけでなく、他の怪人ともお楽しみだったのよね。しかも実の娘の目の前で。あたしの処女を奪って、犯して、嬉しそうによがってたこともあった。娘として幻滅よ」

カームを抱えるサニーは浅く屈伸しながら、彼女の身体を上下に揺する。

「ごめんなさいっ……あの時は…………」

ラブネスカームとしてサニーを陵辱した過去を想起して、カームが胸を詰まらせる。

浄化のために交わったケースはともかく、ストロングに屈した一頃も胸に鈍痛を起こす。

「謝らないでママ。さっきも言ったけど、あたしは今のままで幸せなの。ママのことだってパパが鬼籍に入ってしまってから十年間も、こんなエッチな身体を放置していたのは辛

かったってわかるから、女の悦びを知った今なら許せるの」
「違うわ渚……んん、わたしは決して欲求不満ではなかったの……ぁ……負けてしまった後に犯されて、忘れていた快楽に目覚めさせられてしまっただけなの。だから決して、望んでセックスをしたわけではないのよ。わたしはそんなふしだらではないわ」
媚肉粘膜をくすぐりながら粘い精液が落ちていく度、カームは背筋を震わせる。
精液と入れ違いに秘唇に空気が入ってくる感触にも、膣全体が妖しく疼く。
(思い切りイケなかったからアソコが疼いて……ああ、それにお尻も気になってしまう)
サニーの股間と擦れあうお尻の谷間に、小さくて硬いものが当たっていた。
敏感な臀裂が上から下、下から上へと何度も刺激され、尻タブが小さく痙攣する。
「お尻気になる？　当たっているのはあたしのクリトリスよ。柔らかくておっきなお尻でズリズリしてると、どんどん硬くなっちゃうの」
サニーはほんの少し上体を反らした。
カームの巨尻と自分の陰核を当たり易くし、しつこく彼女の身体を揺すぶる。
「ああっ、いいわ……このままカームのお尻でイかせてもらおうかしら……スーパーヒーローになった実の母のお尻で、敵のしもべになった娘がクリイキするなんて、刺激的よね」
「そ、そんなのいけないわサニー……娘なのにわたしの身体で絶頂するなんてやめて」
「アハハ、真面目なカームにしてみれば、実の娘のオナニー道具になるなんて嫌よね。でも、ママはラブネスカームの時、あたしを犯しながら派手にイったじゃない。ママだけが

許されて、あたしがいけないっていうのは不公平よ」
「それは………あの時は、あン」
娘を弄んだ罪悪感とお尻に纏わり付く快感で悶え、葛藤の喘ぎを洩らすカーム。
「それに、あたしがイったら浄化できるじゃない。カームはあたしを元に戻したいんでしょ？　なら、やっぱりあたしはイった方がいいのよ」
(サニーの言う通りだけれど……わたしまで発情してしまっている今、上手く浄化できるかわからないわ。最悪、またラブネスカームに変わってしまうかもしれない)
身体の問題だけでなく、精神的な課題もあった。
サニーがエピクロスから解放してくれた時、きっと愛娘は穢れた自分への愛情——想いを注いでくれたはずだった。流れ込んできた彼女の清浄なエネルギーを感じると共に、一緒に過ごした幸せで温かな日々の記憶も頭に浮かんできたからだ。
(直感でしかないけれど、相手が渚なら間違いないと確信できる……だから、この子を解放するには、わたしも同じことをしなければならないはずよ……でも、今のこの状態では……ああ、意識を集中できない)
このままでは、サニーが絶頂した瞬間に想いを流し込むなどとてもできないだろう。
(弱気になってはダメ……必ずチャンスは来るわ。それまで耐えるの)
自分を叱咤していると、決意を見透かした風にサニーが話しかけてきた。
「カームもイキたいんでしょ？　だって、あたしが抱えている太股が、ビクビク震えてい

るんですもの……ほら、あたしの指で広げられながら、ストロングや双子くんたちに注がれた濃い精液を漏らすオマ[illegible]コの外と内のお肉も、物欲しそうにヒクついてるじゃない」
「ああ、違うのっ、わたしはイキたくなんて――あンっ」
震え声の弁明は、首筋に吹かれた熱い吐息で嬌声に変わる。
うなじばかりでなく背筋までゾクゾク震え、まともに言葉が言えなくなった。
「ほら、オマ[illegible]コだけじゃないじゃない。身体はどこも敏感になってるわ。さっきの輪姦と、双子くんとのサンドイッチファックでは、思い切りイクことができなかったから悶々としているんでしょ？　だから、こんなに感じやすくなってるのよ」
（ぁああ、ゾクゾクする……サニーに、実の娘にいやらしいことをされているのに）
「これが、絶対敗北理由その三と四よ」
頬と頬を触れさせながら、サニーは続ける。
「理由はどうあれ、パパ以外の男性とセックスして、不貞を犯したこと。不貞のセックスで、エッチな身体が敏感貪欲エロボディーに堕ちてしまったこと」
首を唇ではみながら、サニーはチュパチュパ吸い付いてくる。
実の娘に口唇愛撫される快感と背徳で、カームの意識は濁り出す。
「心も身体も穢されたら、エッチな責めに耐えられるわけがない。早い遅いの違いがあっても、必ず絶頂させられるのだから勝てるわけがないわ。気持ちよくイッてる時にあたしたちの穢れたエネルギーを流し込まれて、またラブネスカームになり果てるしかないのよ」

「そんなことは、はあ、はあ、ないわ……あぅぅぅ……わたしは絶対に諦めないっ」
吸い付きながら舌で首筋を舐め、カームを艶やかに鳴かせ、続ける。
「いいえ、諦めるべきよ。はしたない三十七歳の熟れ熟れボディーを滅茶苦茶にしてくださいって、あたしにおねだりした方が、我慢するよりラクだし幸せよ。あたしを戻すなんて不可能なことは諦めて、母と娘で一緒にイキあいましょうよ」
溌剌と堕落を誘うサニーに、カームは喘ぎ混じりの弱々しい声で反論する。
「それはだめ……ンンンっ、幾ら身体を淫らにされても、欲望には流されない、んあアア、ラクになりたいからと言って、あなたを救うことを投げ出したりするものですか」
重くなる瞼を必死に上げながら、掠れた媚声で断言する。
瞳は潤んでいるものの、意志の輝きはまだ完全には消えていない。
「そう。残念だけど嬉しいわ。だって、まだまだある絶対敗北理由をカームに教えることができるんですもの」
「ぇ……なに……?」
お尻に当たっていたサニーのクリトリスが、硬く大きくなってきた。
戸惑うカームに妖艶に微笑むサニーは、背中から触手を伸ばす。
「んんあっ……なんなの？　……この感じはまさか」
肉紐がサニーのスカートとショーツを外し、放り投げると、カームの淫唇と会陰を貫く風に、熱い肉の固まりがピタリと張り付いた。

「ああ……そんな…………サニーまでこんな物を……」
肉棒だった。
サイズ、太さ、そそり立つ勢い、カリ首の高さといい、自分が経験してきたエピクロスの眷属の巨根に勝るとも劣らない逸物だ。しかも肉棹には女鳴かせのイボが幾つもついて、早くカームを貪りたいと言わんばかりに雄々しく脈打っている。
「カームがあたしを犯してくれたのに負けない、いやらしい触手オチ■ポでしょ？　クリトリスと一体化してるけど、勃起クリトリスとはわけが違うわ。カームはこれでオマ■コ犯されるのに耐えられる？　因みに、あなたが大好きな童貞オチ■ポよ、クスクス」
抱えるカームを掲げるように高く上げるサニー。
カームの淫唇にかかる布を触手がずらし、サニーのペニスの穂先をあてがう。
(熱いわ……あぁ、こんなにドクドクして)
欲求不満で疼いていた女壺が、淫らに熱を帯びている。
クレヴァスよりもずっと巨大な牡肉塊を当てられた肉花弁は、トロリと恥蜜を溢れさせた。汁は亀頭を伝い、カリの裏を経由して、肉棒の根本までを汚していく。
「入れるわよカーム。実の娘の触手オチ■ポ。あたしはまだ童貞だから、童貞イボチ■ポね。ほぉら、あなたのオマ■コに娘の童貞触手イボチ■ポ入っちゃうわよぉ」
忍び笑いをするサニーは、カームの身体の位置をゆっくり下げていった。
「やめてサニー。入れないで……わたし、本当におかしくなってしまうわ」

すっかり発情した今、ペニスに屈服しない自信はまったくない。
きっと、実の娘にヒィヒィ鳴かされてしまうだろう。
カームは逃れようと身をよじるが、サニーは掴む太股に力を入れて逃がさない。
グチュッ……ズズズズズズ。
(あああ、入ってくる……わたし、娘のイボオチ■チンを食べてしまっているわ)
発情して速まっていた鼓動が、ドキンドキンと加速する。
娘と性器で繋がるなどあってはならないというのに、疼いていた膣は巨根に押し広げられる快感と、背徳を犯す愉悦でじぃんと痺れていた。
カームは抵抗を忘れ、ただただサニーが膣を征服するのに身を委ねてしまう。
「あふぅんっ……ママのオマ■コのお肉、オチ■ポに吸い付いてきて気持ちいいっ」
若い太股を強張らせながら、サニーは挿入を深める。
産まれた時に通った秘裂は、娘の肉棒に沿って丸く広がっていた。蜜濡れした媚肉は触手ペニスの亀頭にも、イボで凹凸の激しい肉幹にもピッタリ重なり、絡みついている。
「カームのヒダ、すごく高くて、まるで肉のブラシだわ……んんっ、あいつらが夢中になるわけよ、はあっ、オチ■ポが溶けちゃいそうで気持ちいい」
(アソコが熱いっ……イボで擦れるこの感じ…………何度感じても)
長い睫を色っぽく下ろし、カームは吐息を弾ませる。
熟女の唇から抜け出るのは、日常生活では決して吐かない、情感を孕む吐息だった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ
あなたはどのタイプ？
ドキドキラブラブな
ハーレム系ライトノベル！
サイズ:文庫
二次元ドリーム文庫
戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！
※二次元ドリームノベルズは18歳未満の方は購入できません。
サイズ:新書
二次元ドリームノベルズ
日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！
サイズ:文庫
リアルドリーム文庫
フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！
サイズ:文庫
あとみっく文庫
詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！
キルタイム
検索
Click
電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

あなたのキモチイイをお手伝い！
キルタイムのアダルトコミック誌！

業界唯一！エロラノベ&エロコミック満載!!

二次元ドリームマガジン
2D DREAM MAGAZINE

偶数月17日発売

魔法、催眠、性転換…不思議Hコミック誌！

奇数月12日発売

コミック アンリアル
COMIC UNREAL

KTCといえば闘うヒロインアンソロ！

奇数月下旬発売

メガミクライシス
MEGAMI CRISIS

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!! ※いずれも18歳未満の方は購入できません。